

# 園長日誌



勝部 真長

これまでの四年間、附属小学校の校長を実に楽しく勤めてきたのに、ここで附属幼稚園の園長のお鉢が廻ってくることになった。これは私の意志とは関係ない。あくまで大学内の「家庭の事情」によるものだろうと思っ  
ている。小学校では職員の仕事も私の留任を希望し、再任を学部に出してくれたけれど、学部としては「一人の人が長く同一のいすに坐ることは望ましくない」ということで、私の留任は認められなかった。

第一、附属校園長の選考には、その都度、選考委員会  
が設けられて、委員長は学長が勤めるのである。だから園長を最終的に決めるのは、学長の仕事なのだ。もちろん、園長になれといわれても、これを断る自由は私にも残されている。しかしすでに三十二年もの長い間の大学でメシを食わせてもらっているのに、自分の都合ばかりいっているわけにもいかないではないか。私はそれ

こそ後ろ髪を引かれる思いで小学校を去ることになった。お別れをかねて職員のお懇親旅行に伊豆へ一泊で出かけたが、そういえば私の就任の歓迎会は伊豆山でやったのを思い出す。

人間はお互いにかは別れるのだが、楽しい思い出を残して別れられるのがせめてもの慰めである。小学校では先生たち、職員との人間的触れ合いもさることながら、小学生との心の触れ合いが、校長としての喜びである。

この春、附属高校の一年に入った、昔の小学校の卒業生から便りがきた。「校長先生のお言葉は生涯忘れません」と書いてあったのがうれしかった。校長冥利というものである。私が子どもたちと触れるのは、式日の挨拶、朝礼での訓話、でなければ林間学校、遠足のときくらいしかない。それで私は「校長の話」のときは心をこめて

話し訴えたつもりだ。

子どもは反応が早い。その日のうちに、作文の中に私の話を取り入れて書いている。そして「いい校長先生だなあ」などお世辞も書いている。そのノートを国語の石田先生がよく見せてくださったものだ。

「子どももなかなかお世辞をいう」と私がいうと、教頭の生駒先生が、

「しかし校長の朝の話を子どもたちが楽しみにして聞いてくれて、それを作文に書くなんて、これは容易ならざることですよ」と激励して下さったりした。

それに正月の年賀状と夏の暑中見舞が、子どもたちから二百枚から三百枚の間は来るので、これの返事が大仕事であった。これは楽しみでもあると同時に重労働であった。

幼稚園に替るときに、あの重労働から解放されるかと思ふと、やや解放感を味わった。幼稚園は少しはラクができるだろうか、と考えていたのである。

しかし実際に着任してみると、幼稚園も決してラクなところではないことがわかった。

第一、子どもたちが「園長先生、園長先生」といって

私を見つけると集まって来て、背中に乗ったり前にブラ

さがったり、鈴なりになるから、ネクタイも洋服もメチャメチャになって、しかも体力を消耗するのである。

先日オメツプの関係でアメリカのオレゴン大学の婦人の先生二人が幼児教育の參觀に見えたが、案内に附いて来られた武井女史が、

「体力がいりますね」

と同情して下さった。この間遠足で神宮内苑に行った時も、男の子たちは、園長をつかまえて「これは強盗犯人だゾ」とすっかり犯人に仕立て、みんな追っかけて来て逮捕するのである。私は逃げ廻るうちに、昔、患った狭心症が再発するのではないかと心配した。そして次の句を口ずさんでいた。

遊びをせんとや生れけむ

戯れせんとや生れけむ

遊ぶ子どもの声きけば

魂さえこそ揺がるれ

―梁塵抄―

(お茶の水女子大学附属幼稚園)